

パブリックスペース・デザインガイドライン

- 1 ランドスケープ
- 2 **植栽**
- 3 サイン
- 4 光環境
- 5 アート
- 6 ファニチャー
- 7 色彩
- 8 素材

LANDSCAPE  
**GREEN**  
SIGN  
LIGHTING  
ART  
FURNITURE  
COLORING  
MATERIAL

## 1) コンセプト

『植栽』は、新キャンパスのランドスケープを特徴づけるとともに、新キャンパスの利用者にうるおいと安らぎをもたらす重要な要素となる。

一方、新キャンパスの整備は長期にわたり、さらにその成熟のためには、数十年を要する。植栽を行う際、樹木の選定、配置および植樹については、その成長とともにキャンパス空間が成熟することを視野に入れ、植樹当初から成熟期における良好な空間形成に向けた計画が必要である。

デザインマニュアルにおいては、以下のコンセプトに基づき、新キャンパスにおける『植栽』の「あり方」を示す。

### 感性を刺激する多様な「緑」の導入

自然林構成種による緑豊かな樹林から自然風景を作る疎林、デザインされた木立ち、草地など、多様な緑の環境を創出する。  
四季の変化を感じさせるとともに、生き物の生息や生き物とのふれあいも可能な環境を形成する。

### 建築と調和した景観の形成

建築周囲への高木植栽の導入によって建築の硬質感や圧迫感を緩和するとともに、ハードな空間に適度な緑陰を提供する。

### 種の保存及び地域遺伝子の保護：樹種選定の原則

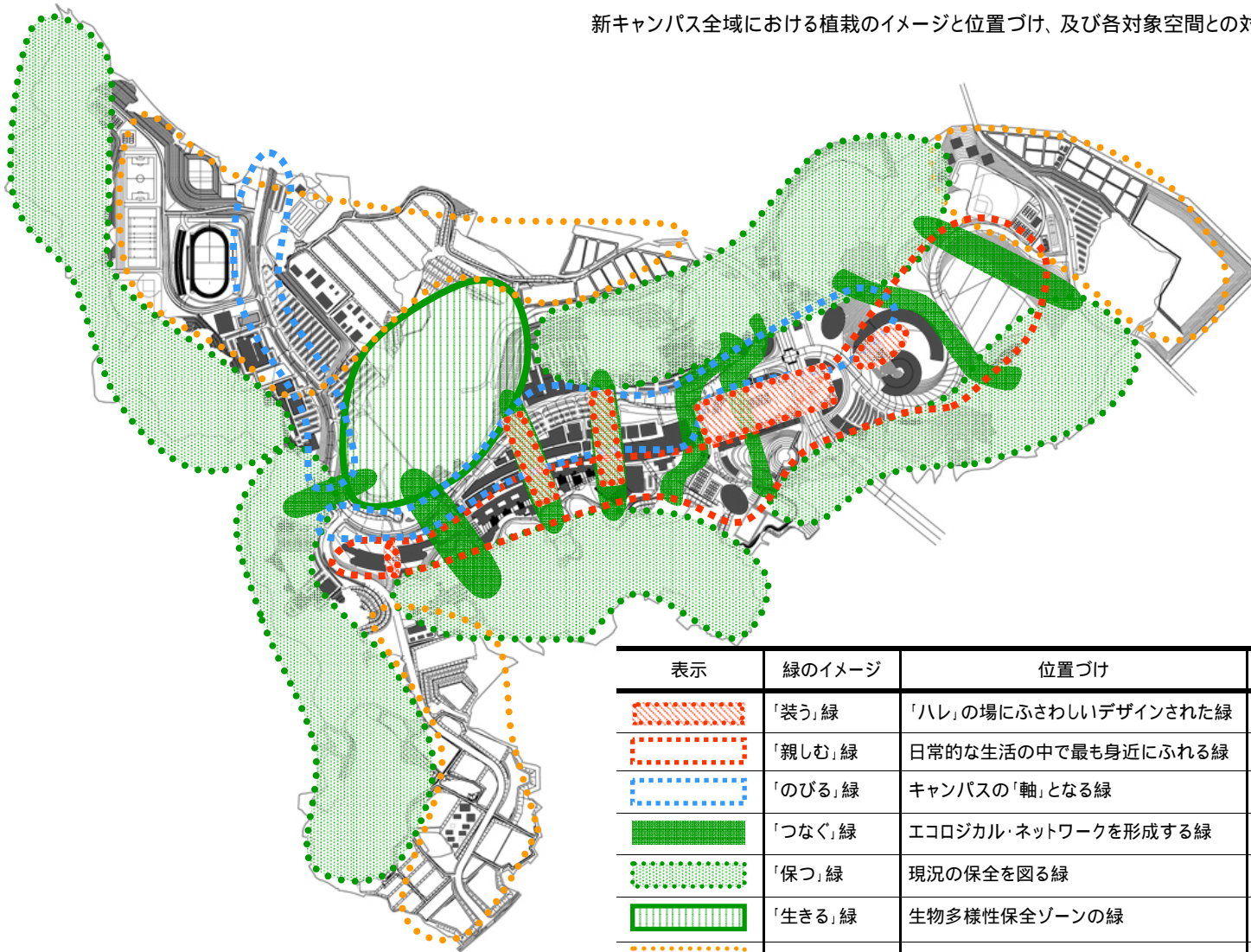
周辺に存在する樹種を導入する場合には、苗や種子をできるだけ他から持ち込まない。  
外来種等を使用する場合には、在来種との交雑の可能性の低いものを使用する。

### 安全性や管理面への配慮

低木使用を極力減らすことによる「見通し」の確保、及びセキュリティの向上を図る。  
剪定等の維持管理を軽減する樹種構成・配植を検討する。

2) ゾーニング

新キャンパス全域における植栽のイメージと位置づけ、及び各対象空間との対応を下图に示す。



表示	緑のイメージ	位置づけ	対象空間
	「装う」緑	「ハレ」の場にふさわしいデザインされた緑	大学の顔～キャンパス・モール、グリーン・コリドー
	「親しむ」緑	日常的な生活の中で最も身近にふれる緑	キャンパス・モール、キャンパス・コモン
	「のびる」緑	キャンパスの「軸」となる緑	幹線道路沿道・未来のポテンシャル軸
	「つなぐ」緑	エコロジカル・ネットワークを形成する緑	グリーン・コリドー
	「保つ」緑	現況の保全を図る緑	保全緑地、ネイチャー・トレイル
	「生きる」緑	生物多様性保全ゾーンの緑	保全緑地(生物多様性保全ゾーン)
	「なじむ」緑	周辺地域との接点となる緑	農場ゾーン、運動施設ゾーンなど

植栽ゾーニング図

- 2 植栽

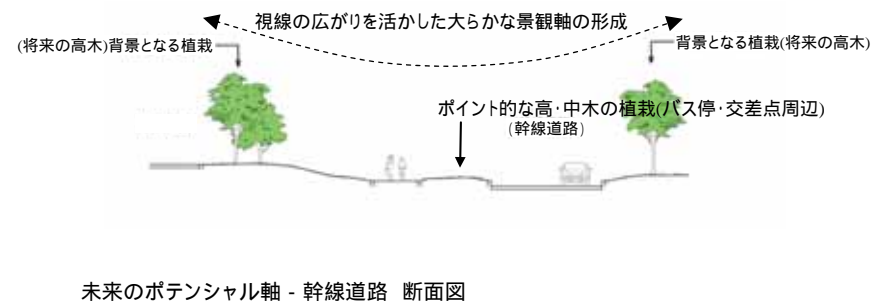
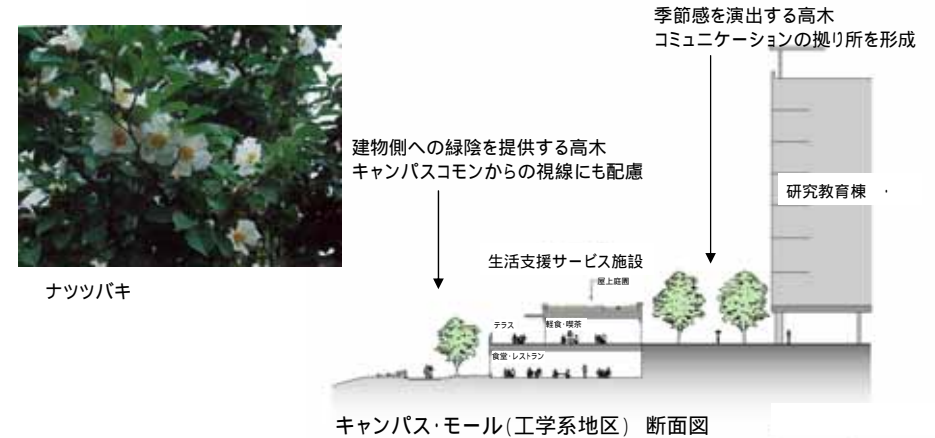
3) 植栽計画方針

各対象空間における「植栽計画方針」及びそれに基づく「植栽の構成」「樹種選定の留意点」等を下表に示す。  
また、モデル空間における「主な植栽樹種(例)」についても、併せて示す。

対象空間	緑の位置づけ	想定されるアクティビティ	植栽計画方針				植栽の構成
			多様な「緑」の導入	建築との調和	種の保存	安全性・管理面の配慮	
キャンパス・モール	「親しむ」緑	・出会う、集まる、語らう ・移動する・景色を楽しむ ・休む、お茶を飲む、食事をする	・コミュニケーションの“拠り所”の形成 ・美しく快適な空間の形成 ・緑陰の提供 ・季節感の演出 ・記念樹(現キャンパス分)の移植による記憶・イメージの継承	・建築のボリューム感の緩和 ・建築側への緑陰の提供	・在来種との交雑可能性の低い樹種の使用	・セキュリティ対策(見通し確保)のため、原則として低木は使用しない	・落葉主体の高木+地被 ・東西の軸線を意識させる連続的な植栽 ・メインとなる樹種を限定し、モール全体の統一感を形成
	「装う」緑	[センター地区西側]:福利厚生施設前 ・集まる、語らう、学祭等の出店、集会など [センター地区東側]:全学教育施設前 ・集まる、語らう、休む、記念撮影					・リズムカルな列植による明確な「軸」の形成
幹線道路	「のびる」緑	・移動する ・木陰で休む(バス停周辺等) ・語らう	・周辺地形や緑地への視線を活かした大らかな景観の形成	・背景となる植栽で、視線を遮りながら周囲の環境になじませる	・地域性の苗木・種子等の使用	・セキュリティ対策(見通し確保)のため、原則として低木は使用しない	・路側部:原則として地被植栽のみ ・駐車場入り口や交差点、ゲート、バス停(休憩スポット)周辺:ポイント的な高木
		[幹線道路沿い緑地]	・幹線道路側からの“背景”となる景観の形成 ・周辺緑地景観との連続感の形成	・実験施設群の遮蔽	・地域性の苗木・種子等の使用 ・生物多様性保全ゾーンに対しては高木植栽によって保護		・高木+地被
		[沿道法面]	・自然回復による法面修景	-	・地域性の苗木・種子等の使用	・複層構造を持った異齢林の再生により、長期的に安定した樹林を形成	・播種や苗木植栽、高木植栽などのランダムな組み合わせ
キャンパス・コモン	「親しむ」緑	・散策する・景色を楽しむ ・気分転換	・「人工」から「自然」へと移り変わる景観の演出	・建築のボリューム感の緩和 ・建築側への緑陰の提供	・在来種との交雑可能性の低い樹種の使用	・セキュリティ対策(見通し確保)のため、原則として低木は使用しない	・高木+地被 ・エッジ部分を除く
		[広場空間] ・集まる、語らう、溜まる、くつろぐ、寝転がる、花見をする ・軽いスポーツをする ・食事をする	・大らかなランドスケープの形成 ・多様でフレキシブルな利用への対応	-	・地域性の苗木・種子等の使用 ・保全緑地の林縁部の保護		・保全緑地とのエッジの形成 ・中低木による“なじみ”の形成

## - 2 植栽

樹種選定の留意点	モデル空間における主な植栽樹種(例)	凡例
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新緑、花、紅葉など季節感豊かな樹種</li> <li>・明るい木陰を形成する落葉樹</li> </ul>	(主) ナツツバキ (添) サルスベリ、ナンキンハゼ、エンジュ、アラカシ株立など	M-1
<ul style="list-style-type: none"> <li>・季節感を演出する落葉樹</li> <li>・端正な樹形</li> </ul>	フウノキ(並木) 【風土の表象】: ヤマモモ大木(移植) 【記念樹】: クロマツ、ウメ(箱崎キャンパスからの移植)	M-2
<ul style="list-style-type: none"> <li>・明るい木陰を形成する落葉樹</li> <li>・彩りを添える中木(花木)</li> </ul>	【ポイント植栽】: エノキ、ヤマボウシ、エンジュなど 地被植栽(シバ)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・周辺自然植生(保全緑地など)構成種の使用を基本とする</li> </ul>	【背景となる樹林】 クスノキ、アラカシなど ケヤキ、エノキ、ソメイヨシノ、ヤマボウシ、エゴノキなど	R-1
<ul style="list-style-type: none"> <li>・周辺自然植生(保全緑地など)構成種</li> </ul>	【自然回復緑化】 高木 + 苗木 + 播種: スダジイ、アラカシ、クスノキ、ヤマモモ、コナラ、ヤマザクラなど 添景となる花木: ヤブツバキ、アセビ、モチツツジなど	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新緑、花、紅葉など季節感豊かな樹種</li> <li>・明るい木陰を形成する落葉樹</li> <li>・野鳥や昆虫の集まる樹種</li> <li>・記念樹等の活用</li> </ul>	ヤマザクラ、ソメイヨシノ、コナラ、クスギ、シンジュ 【記念樹】: 各学部ゆかりの記念樹等の移植・活用	C-1
<ul style="list-style-type: none"> <li>・周辺自然植生(保全緑地など)構成種を基本に、花の咲く低木類を選定</li> <li>・記念樹等の活用</li> </ul>	地被植栽(シバ) 【保全緑地のエッジの形成】 : アセビ、ヒサカキ、マサキ、ヤマツツジ、ガマズミ、ムラサキシキブ、リョウブなど 【記念樹】: 各学部ゆかりの記念樹等の移植・活用	C-2



- 2 植栽

対象空間	緑の位置づけ	想定されるアクティビティ	植栽計画方針				植栽の構成
			多様な「緑」の導入	建築との調和	種の保存	安全性・管理面の配慮	
グリーン・コリドー	「装う」緑	・移動する ・集まる ・木かげで休む	・地区の中心となる象徴的な景観を形成 ・“こかげ”の提供	・「軸線」「ゲート」の明確化 ・実験施設群の遮蔽	・在来種との交雑可能性の低い樹種の使用	・セキュリティ対策(見通し確保)のため、原則として低木は使用しない ・植栽間隔を広く確保し、自然樹形を形成する	・高木+地被 ・整形的な列植～疎林状のランダム植栽まで、場に応じたバリエーション豊かな植栽とする
	「つなぐ」緑	(生態系ネットワークの形成)	・南北の保全緑地をつなぐ生態系ネットワークの形成 ・実験的な自然回復の試み	-	・地域性の苗木・種子等の使用	・複層構造を持った異齢林の再生により、長期的に安定した樹林を形成	・播種や苗木植栽、高木植栽などのランダムな組み合わせ
大学の顔 ライバルポイント	「装う」緑	[アカデミック・プラザ] ・出会う、集まる、移動する ・記念撮影・バスの乗降 [コミュニティ・プラザ] ・地域との交流・国際交流 ・コンサートなどのイベント開催	・“絵になる”印象的な景観の形成	・建築のボリューム感の緩和	・在来種との交雑可能性の低い樹種の使用	・セキュリティ対策(見通し確保)のため、原則として低木は使用しない	・高木+地被 ・生垣
		[学園通線交差点付近]					・高木
ネイチャー・トレイル	「保つ」緑	・散策、リフレッシュ、景色を眺める ・自然観察・体験学習	・原則として保全	-	・地域性の苗木・種子等の使用		・ポイント的な補植(花木:低木) ・沿道の除伐等
保全緑地		・学術研究 ・環境教育	・原則として保全	-			・補植による林縁部の修復 ・竹林の抑制・転換方法の研究・実験
その他 [大型実験施設群]		[棟間]:休む、語らう	・実験的緑化空間としての活用		・在来種との交雑可能性の低い樹種の使用	・セキュリティ対策(見通し確保)のため、原則として低木は使用しない	・棟間:高木+地被 ・壁面:高木+ツル性植物 ・屋上:地被・地衣類

移植樹木について

現キャンパスの記憶やイメージの継承を図るため、記念樹等の移植を検討する。現キャンパスからの樹木移植についての考え方を以下に示す。

移植対象樹木の選定について

現キャンパス内の記念樹等については、各部署等の判断の下に、原則として『九州大学構内移植候補樹木調査』(1995.10～1996.2調査)に基づき、  
 ・移植価値:「高い」または「ある」に該当するもの  
 ・移植工事の作業性:技術的に「困難」でないもの  
 ・移植に対する耐性:文献等により「中」以上の耐性を有するもの  
 等の条件を満たすものを優先的に移植の対象とする。

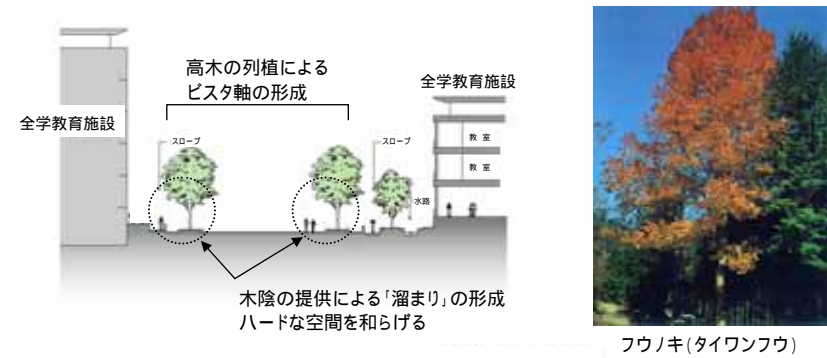
植栽位置(移植先)について

・原則としてキャンパス・コモン内に移植する。  
 ・各対象樹木にゆかりのある部局周辺に配置することを原則とするが、周辺植栽とのバランスや景観的な調和、植栽地の利用形態等を考慮し、植栽位置の決定を行う。



## - 2 植栽

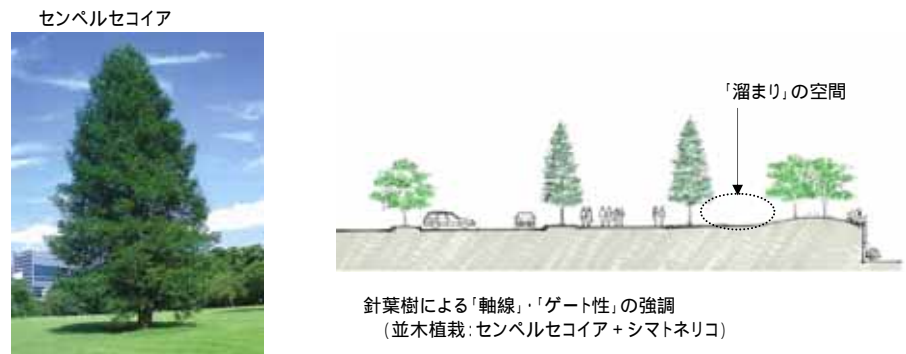
樹種選定の留意点	モデル空間における主な植栽樹種(例)	凡例
・各空間の位置づけを踏まえ、それぞれに特徴的な樹形・葉形の樹種を選定	並木植栽: コリノキ 並木植栽: センベルセコイア + シマトネリコ 疎林植栽: アラカシ、クスノキ、ヤマザクラ、コナラ、ミツデカエデ、ザイフリボク 【風土の表象】: クスノキ、リョウブ(移植)	G-1
・周辺自然植生(保全緑地など)構成種の使用を基本とする ・添景となる花木についても同様の基準による	【自然回復緑化】 高木 + 苗木 + 播種: スダジイ、アラカシ、クスノキ、ヤマモモ・コナラ、ヤマザクラなど 添景となる花木: ヤブツバキ、アセビ、モチツツジなど	G-2
・端正な樹形 ・季節感を演出する落葉樹	フウノキ(キャンパスモールとの一体的景観の形成) 【風土の表象】: ヤマモモ(移植)	A-1
・遠景からも認識される大高木	クスノキ(箱崎キャンパスからの移植)	A-2
・周辺自然植生(保全緑地など)構成種を基本に、花の咲く低木類を選定	【沿道ポイント植栽】 アセビ、ヤマツツジ、ガマズミ、ムラサキシキブなど	
(原則として植栽しない)	(原則として植栽しない)	
【棟間】 ・明るい木陰を形成する落葉樹 ・彩りを添える中木(花木)	【棟間】 ナンキンハゼ、エンジュ、ヤマボウシ、エゴノキなど	F-1



キャンパス・モール～大学の顔 断面図



グリーン・コリドー(工学系中央) 断面図



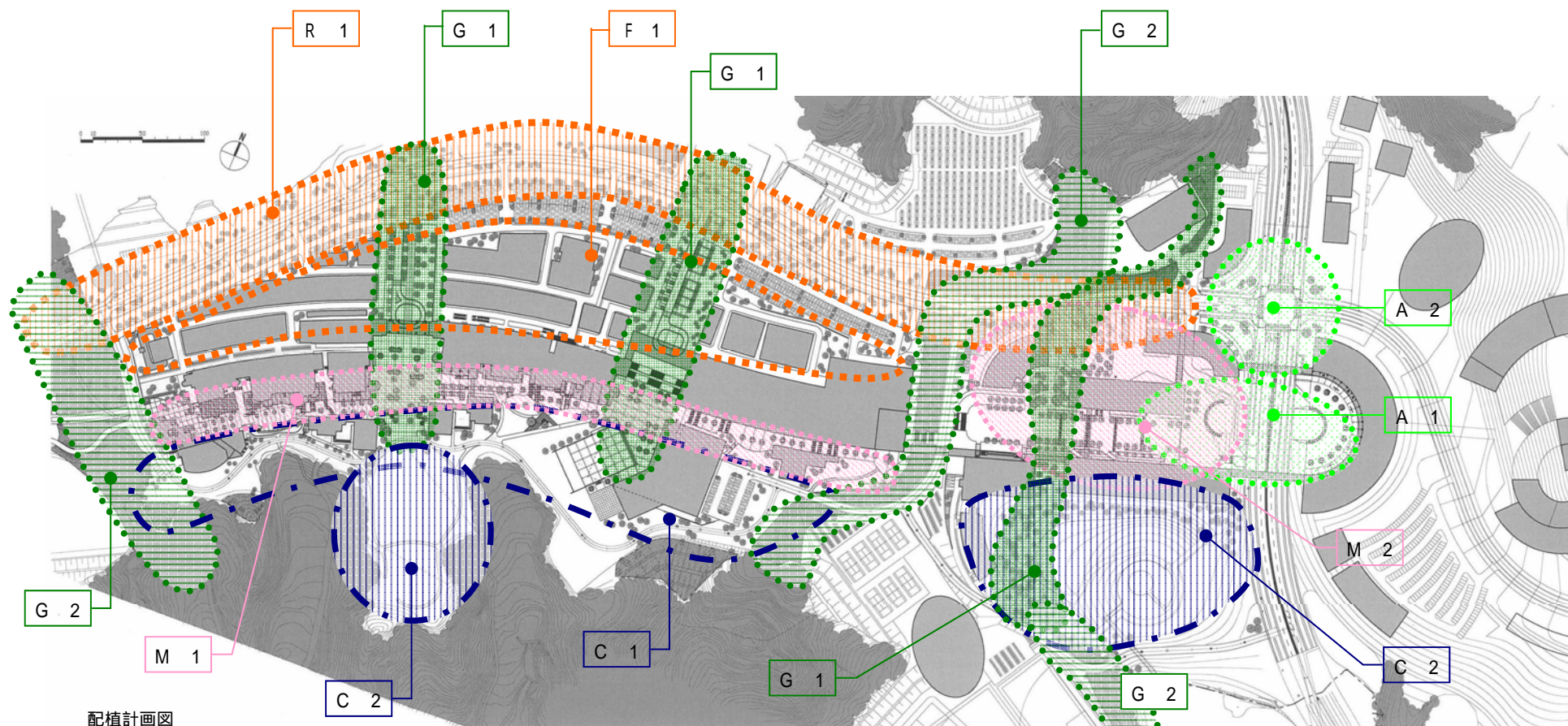
グリーン・コリドー(工学系東) 断面図





#### 4) 配植計画

モデル空間における「植栽計画方針」の具体的展開として、各エリアとの対応を下图に示す。



配植計画図





### 5) 植栽整備水準設定のイメージ

新キャンパスへの移転及びその後の空間の成熟には数十年の期間を要する。また、その面積も広大であることから、新キャンパスのすべての植栽空間について、移転当初から完成形を目指した植栽を行うことは経済的にも負担が大きく、現実的でない。

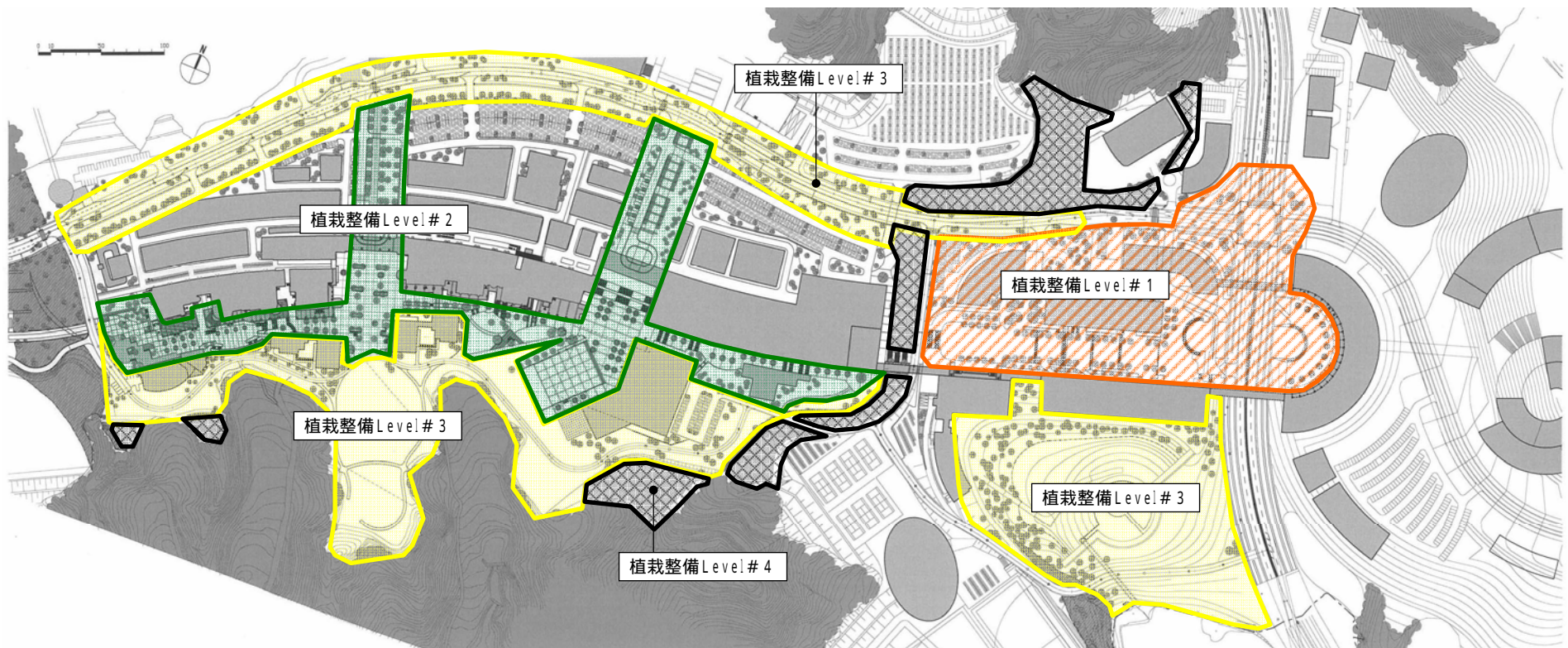
新キャンパスにおいては、対象空間の位置づけ等を踏まえた「植栽整備Level」を設定し、完成までのおおむねのタイムスパンを想定した効果的な植栽設計を行うことが適切である。デザイン・マニュアルでは、以下の4段階の「植栽整備Level」を設定するとともに、モデル空間への適用事例を示す。

植栽整備Level # 1: 「大学の顔」として、移転当初からほぼ完成形に近い規格での植栽を行い、早期に景観の形成を図るエリア

植栽整備Level # 2: 「大学の顔」に準ずる空間として、おおむね5～10年後の完成を目指して緑地の育成を図るエリア

植栽整備Level # 3: 比較的規格の小さい樹木を主体とし、おおむね10～20年後の完成を目指して緑地の育成を図るエリア

植栽整備Level # 4: 苗木植栽等を主体とし、おおむね数十年先の完成を見越した将来的な緑地として育成を図るエリア



## 6) 維持管理の考え方

既に述べたように、『植栽』は、新キャンパスのランドスケープの形成や生活者に安らぎをとうるおいをもたらす重要な要素であり、美しいランドスケープや快適な環境の維持・向上を図るため、緑地(植栽)の適切な維持管理は不可欠である。

新キャンパスの空間には、新たな植栽地を含む広大な緑地が含まれていることから、合理的で適正な維持管理を行うことによって維持管理コストの縮減を図ることは、大学経営の面からも重要な課題である。

植栽地維持管理コスト縮減のための提案を以下に示す。

管理レベルの設定により、管理対象の重点化を図るとともに、管理水準の適正化を図る。

また、植栽地維持管理費の中で大きな比率を占めるのは、芝刈り・除草等の面的な作業である。この傾向は、対象面積の大きい新キャンパスにおいてはさらに顕著になることが予想される。したがって、

芝刈り等、機械施工の支障となる段差を設けない。また、低木等の植栽を減らす。  
チップ材等を活用したマルチング施工等により、雑草の侵入を抑制する。

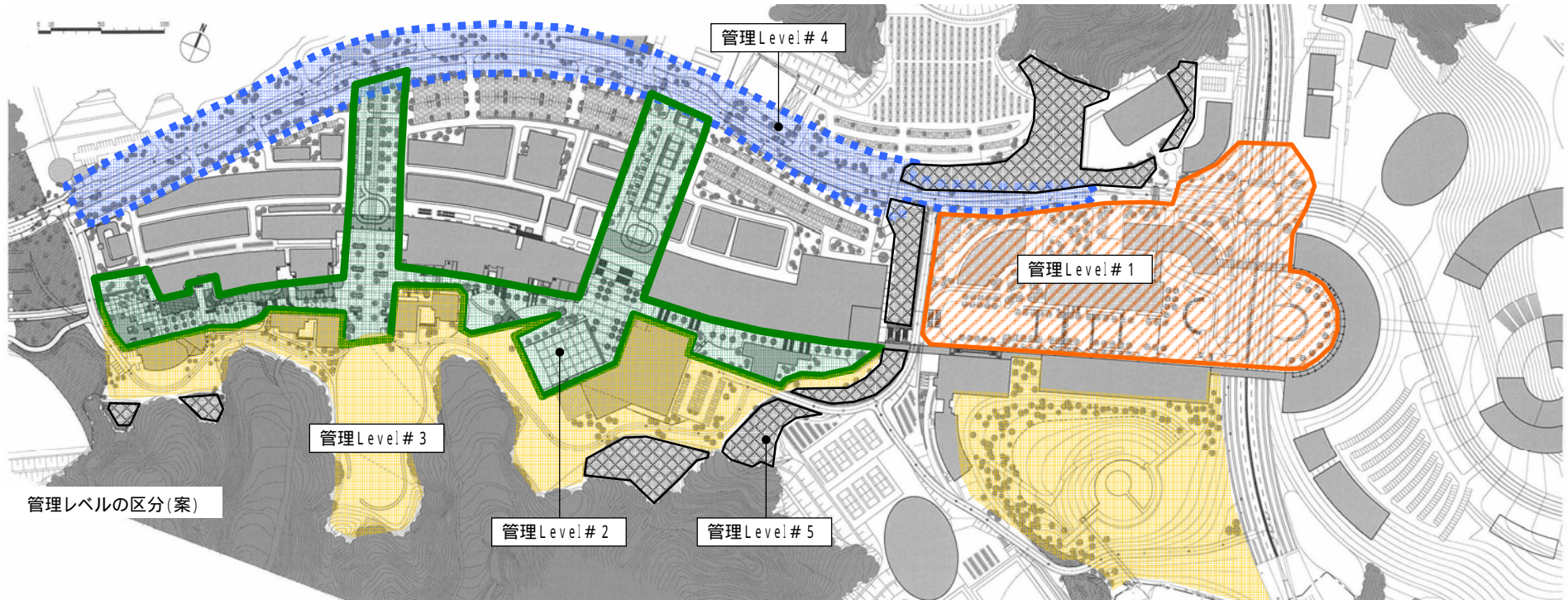
等の対応が有効となると考えられる。なお、各年次における予算状況に応じて詳細に検討する必要がある。

想定される管理レベルと管理方針(案)

区分	管理対象	管理方針
管理Level#1	センター地区	「大学の顔」としての景観を維持するため、定期的な剪定・除草・清掃を行う。
管理Level#2	グリーン・コリドー キャンパス・モール	「大学の顔」に準じた空間として、最小限の剪定を行う 定期的な芝刈り(機械)及び除草を行う。
管理Level#3	キャンパス・コモン	単一種の芝生成成を目標とせず、雑草の混入を許容しつつ芝地(草地)を維持する。 定期的な芝刈り(機械)を基本とし、必要に応じて除草を行う。
管理Level#4	幹線道路沿道	必要に応じて、芝刈り(機械)及び除草を行う。
管理Level#5	グリーン・コリドー(自然回復型) 造成法面	植栽当初に除草を行う以外、原則として管理は行わない。 除草・清掃は、当初3年間程度とする。



- 2 植栽



管理レベルの区分(案)

対象面積 (㎡)		年間回数 (回)					清掃	撒水の考え方
エリア全体	植栽	冬季剪定	夏季剪定	芝刈り	除草			
28,000	8,100	0.2	0.5	-	3	50	植樹柵:ドリップチューブによる自動撒水とする その他植栽地:撒水栓による手動撒水とする	
29,000	9,600	0.2	0.2	2	2	12	撒水栓を設置し、手動で撒水を行う	
45,000	31,500	0.1	0.2	2	0.2	6	撒水栓を設置し、手動で撒水を行う	
17,000	13,600	0.1	-	1	0.2	6	撒水栓を設置し、手動で撒水を行う	
18,000	18,000	-	-	-	0.5	3	非常時を除き、撒水を行わない	

年間回数については、各年次における予算状況に応じて検討を要する。